

牛たちの軌跡

乾燥した大地をゆく

ニジェールは国土の4分の3が砂漠の国だ。残りの4分の1の地域にも乾燥した大地が広がり、植物はまばらにしか見られず、川は雨が降ったときのみ水をたたえる。そんなニジェールの自然に、単に「厳しい」という表現を当てはめることもできるだろうが、私は「力強さ」や「雄大さ」といった表現がとてもよく合うと思っている。

私は2010年からニジェール南部の農耕民ハウサの村で、住み込みで調査をしてきた。村から一歩出ると、牛たちが列をつくって硬い堆積岩のうえを移動している光景を目にする。最初にニジェールを訪れたとき、牛たちが暑く乾燥した大地を力強く進む姿が印象的だった(写真①)。

調査している村には牧畜民のフルベも暮らしている。フルベの人びとは毎日を牛とともに過ごし、日中は草の生える水辺まで牛たちを連れて行く。

牧畜民だけでなく、農耕民であるハウサにとっても牛は身近な存在だ。一度、友人に「ハウサ」という名前の由来を聞いたことがある。友人は「ハウサ語で *hau* (乗る) *sa* (牛)、牛に乗る人びとの意味だよ」と語った。ハウサの男性は牛を

乗りこなして初めて一人前になると言われているのだそうだ。

牛にかける思い

毎週金曜日、近くの町では市場がたつ。市場ではトウジンビエやトウモロコシなどの地元産の穀物や、香辛料、塩、野菜、生活雑貨などの国内外から輸送されてきた商品がおもに売られている。人びとは週に一度、数km離れた村々から町に集まってくる。

私も月に一度、村では飲めない冷たいコーラを楽しむために、7kmの道のりを歩いて市場に向かう。道中、それぞれの村から市場に向かう人びとと合流し、話しながら市場に向かって歩く。町に近づくにつれ人の数が増えていき、徐々にざわめきが大きくなって、市場に入ると活気のある客引きの声がいたるところから聞こえるようになる。

2012年10月、私はイスラームの祝日である犠牲祭に初めて参加させてもらった。犠牲祭はイスラームの祝日であり、人びとは動物を1匹生贄として捧げて、この日を盛大に祝う。いつもの金曜市でもかなりの活気があるのだが、犠牲祭直前の市場はさらなる活気を帯びる。市場の規模はいつもの金曜市の3倍以上にもなり、犠牲祭に向けて人びとが食材や服飾品を買い求める。



写真①堆積岩が露出する場所を歩く牛

いつもはただの広場として使われている場所も、この日ばかりは人びとと商品で埋め尽くされる。どこにこんなに隠れていたのかと思うほどの人が市場に押しかけ、歩くのも一苦労だ(写真②)。

犠牲祭の直前に開かれる市場では、広場の一角に家畜の市場が設けられ、たくさんの家畜が集まってくる。この時期に開かれる市場には、生贄にする家畜を求めてたくさんの人びとがやってくるためだ。いつもよりも多くの家畜が集まるため、生贄にする家畜だけでなく、飼養するための家畜の購入を考えている人も家畜市場に集まってくる。市場のいたるところでは、牛の持ち主が客を呼び止め、自分の牛がいかによいかを説いている。この地域では、牛はほかの家畜と比べて価格が高く、購入すれば重要な財産となる。大きな買い物であるがゆえに、客は慎重に牛を見さだめ、牛の持ち主と値段交渉をおこなう。丹精こめて育てた牛だから、持ち主も価格を妥協することはできない。家畜の市場に行き人びとの真剣な交渉を見ていると、牛にかける人びとの思いを見ることができる。人びとにとって、牛は身近だけでなく貴重な存在なのだ。

牛持ちの物語

2012年11月のある日、私は村周辺の侵食の状況を把握するため、調査助手のユスフと一緒に

に雨水が地表面を侵食し深い溝になったガリという地形の分布を調べていた。ガリの近くには、同じく水の侵食でできたリルと呼ばれる細い溝がたくさんある。侵食が進み、リルが発達するとガリになる。

調査を進めていると、リルとは少し違う地面の溝を見つけた。その溝だけ、丘の向こう側まで長く続いている。先を歩くユスフに向かって「ねえ！この溝はなに？」と声をかけた。ユスフは「ヒトミは初めて見るのか？これは『牛の道』だよ。」と言った(写真③)。

「牛？」私は思わず声をあげた。いま私たちが歩いている場所は、ツルハシを使っても穴があかないほど硬く、堆積岩がむき出しになっている。牛がこの硬い堆積岩の地面に溝をつくったということに、私はとても驚いたのだ。「そうだよ。これは牛が毎日通ってできた道だよ。」ユスフは立ち止まって『牛の道』についての説明を始めた。

ユスフによると、数十年前、村にマイシャース(ハウサ語で「牛持ち」の意味)と呼ばれるハウサの男性が暮らしていたのだそうだ。マイシャースはひとりで300頭ほどの牛を所有していた。畑に作物が植えられている雨季のあいだ、彼の300頭の牛たちはこの場所を通過して放牧地まで行き、夕方に同じ道を引き返していた。村の周辺には、当時から畑がつくられていたので、雨季のあいだは村の北側にあるこの丘を越えたところ



写真②犠牲祭の直前には大きな市場が開かれる

ろまで放牧に行く必要があったのだそうだ。

いまでは、数百頭の牛の群れを見かけることはなくなってしまったが、当時は牧畜民のフルベはもちろんのこと、農耕民のハウサもたくさんの牛を所有していたのだという。私が見つけたマイシャーヌの『牛の道』以外にも、村の周りには『牛の道』があるらしい。

丘のずっと向こうまで『牛の道』は続いていく。長い時間をかけて少しずつ、牛たちはこの道を刻んだ。私はその場に立ち止まり、たくさんの

牛が長い列をつくり、小高い丘を越えていく情景を思い描いた。

土に刻まれる牛たちの歩み

フルベの友人アルは時折「昔はこの辺りをたくさんの牛たちが歩いていたよ。畑もいまほど多くなくて、牧草ももっとたくさんあった。牛たちは嬉しそうにそのなかを歩いていたよ。よく太っていて、よく乳を出した。でも、1970



写真③『牛の道』を歩くユスフ

年代におきた干ばつで、多くが死んでしまった。フルベは昔のように牛と暮らせなくなってしまった」と寂しそうに語る。

フルベは、1970年代の大規模な干ばつで多くの牛を失ってしまった。アルの父親もまた、干ばつですべての牛を失った。高値で取引される牛をあらためて購入することは難しく、アルはいま1～2頭の自分の牛に加えて、ハウサから預かった牛を世話することでお金や作物を得て暮らしている。ハウサの牛たちは心優しいアルに

よく懐き、アルもハウサの牛たちを自分の牛のように大事に世話している。

いまでは多くのフルベがアルと同じように、ハウサの牛を預かって生活している。フルベに牛を預けているハウサも、同じように干ばつで牛を失い、昔ほどたくさんの牛を持てなくなってしまった。ハウサの人びとは世帯ごとに1～2頭ずつ、牛をフルベに預けている。

人びとの話を聞いていると、このあたりの牛は減少したうえに、昔に比べたらやせ細ってし



写真④アルが預かっている牛たち

まったようだ。人口が増えたために、マイシャースの牛たちが放牧されていた場所も、いまでは畑になってしまった。人びとは牛をさらに遠くまで連れて行く必要があり、各地にできた『牛の道』を通らなくなった。牛の列も昔ほど長くはない。

アルが語るように、いまでは状況が大きく変わってしまった。けれど、今日も牛たちはやせた体で硬い地面を踏みしめ、力強く歩いている。ときには気温が50度近くにもなる暑いニジェールで、新鮮な草と水を目指して、しっかりと前を向いて。その歩みは、これから何年もかけて、牛たちの新たな軌跡をニジェールの大地に刻んでいく。

桐越仁美